

海軍

海軍北葦航空隊

主計志願兵として

生き残る

鳥取県 山田時弘

大正十二年三月二十三日、鳥取県東伯郡成美村十二

一（現赤碕町）の農家の長男として生まれましたが、今の時代と違い、戦争^{たけなわ}の時代で、役場から映画を持ってきて見せ、海軍志願兵の募集をしていました。学友たちは陸軍に志願したりしているので海軍へ志願しよう^よと決心しました。家族の者の内心は分からないが、表面的には喜んで祝ってくれました。

徴募検査は陸軍と同じ倉吉小学校でしたが、昭和十七年の秋ごろだったと記憶しています。昭和十八年四月二十日、呉志主第四六八三とし、大竹海兵団に入団、九六分隊の十二教班で第五期主計科でした。

海兵団の教育は、主計科も一般の兵科と同じで、カッター、手旗、陸戦等も一通りの訓練を受けますが、青年学校出身ですから他の人より割合楽に感じました。しかし、走らされて脛を痛めました。過労のためだったのでしょう。教班は十七名の新兵に班長がつき、七月ごろに教育を終了し、卒業のときは呉鎮守府の長官南雲中将の閲兵がありました。

カッターの訓練は宮島まで漕ぐのですが、預けていた給料の中から五〇銭出してもらい、宮島名物の杓子^{しやくし}を買い、文字を書いてもらいに家に送ったのが、いま

だに印象に残っています。宮島と大竹海兵団とは隣接
しています。鹿がいるので、分隊長の川合大尉が「笑
え」と号令を掛けられ、皆思わず笑いました。

七月海兵団の隣の海軍潜水学校付きとなり、約半年
炊事係をやったのですが、材料は全部軍需部から受け
飯炊きです。学校では、潜水艦の出勤実習というのが
あり、実際に潜水艦に乗せられます。潜水、航行など
するが海上は揺れるが潜水すると全く静かで、船酔い
はしません。艦内の空気はハッチから取るので呼吸に
支障はない。昼は艦で手伝い、夜は居住場所は狭く、
機械の間で寝るのですが、私は潜水母艦の役目をして
いる「錦丸」で寝ていました。爆雷投下すると魚が浮
いてくるが、艦内にいると振動で気味が悪いものです。
昭和十九年一月、普通科経理術練習生（普経七八期）
とし、海軍経理学校の品川の分校（築地は士官）に入
校しました。我々より遅く築地に入った人は一足早く
中尉に任官し、その人たち（中曾根、小沢先生ら）が
分隊長となりました。

学校では経理実務と衣糧実務とがあり、帳簿の方と

食・衣の方に分かれるのです。私は衣糧の方が楽だと
思ったが、主計の方へ行きました。卒業は五月ごろで、
いよいよ部隊や、艦船勤務となるのです。

卒業し、一時呉海兵団に入団、南方へ行く人は南方
向きの衣服をもらう。一月五日に第七三二海軍航空隊
付きを命ぜられ、呉から門司まで、一般の列車に乗っ
たのですが略装だから一時駅員に止められました。
「備後丸」に乗船、門司港、台湾の高雄では夜間初め
て空襲に遭いました。比島のマニラからセブ島経由で、
ミンダナオ島ダバオの七三二空へ着任しました。経理
学校を出るとき、任地はベナンと聞いていたが、マリ
アナでは全滅して日本軍はダバオに帰っていたのです。
そこで、私は主計長の庶務主任（中尉）の下で七三二
空の残務整理に当たりました。

航空海兵団的な、韭島海軍航空隊が編成され入隊、
副官部（司令―副官―副官となっていたと思う）勤務
となりましたが、上司は主計長であったか、副官であっ
たか。私は副官部では若かったなので、先行せよと、再
度「備後丸」に乗船、出航しました。そのとき、船に

はサイパン島などの引揚者、一般邦人が同船していませんでした。

ダバオ湾口で、正午ごろ特務艦の「鶴見（丸）」が敵の潜水艦に撃沈されました。「備後丸」には小口径の砲と単装一三ミリの機銃、爆雷が装備されています。真っ昼間のことで、弾かれたような音がして、「鶴見」は船腹を出していました。私はよく、門司からダバオまで無事にこられたなあと幸せに感じました。

「備後丸」は、島の間を縫うようにして航行したので随分日時がかかりました。マニラに着いたら、本部の方が先に到着していました。本部の人たちは私を見て「よう生きていたなあ」と言っていましたから、「備後丸」もやられたのかと思っていたのでしょうか。そのように、空も海も連合軍の手中にあったのです。

菲島海軍航空隊は、北菲、中菲、南菲とに編成替えをしていました。そのころ、マニラが初空襲（九月二十一日？）を受けました。私は初めは演習通達が出ていて、本当の空襲とは知りませんでした。本当にひどい空襲で、湾内には沈没した船の帆柱が林のように立っ

ていました。私はその時、部隊で仕事をしていました。その状況については北菲空で司令の通達を聞きました。続いて捷一号作戦開始（九月二十五日一次準備下令）、レイテ作戦が始まりました（十月二十日、米軍四個師団、レイテ上陸）。

我々はマニラのニコルス飛行場にいました。空襲は激しくなり、副官部は兵舎を出て退避しましたが、私は若いので連絡係としてただ一人残りました。副官部には防空壕もあったが、普通の兵舎でした。航空隊は兵舎と飛行場と離れていましたが、士官も時には息抜きに來られました。

敵がルソン島へ上陸開始しました。リンガエン湾と他の方と両側から上陸したらしいとの知らせでした（二十年一月九日、リンガエン湾沿岸に上陸開始）。經理部の衣糧の方は私より下がいたのですが、副官部では私が一番若かった。しかし古兵にいびられたことはありませんでした。

米軍がマニラへ侵入し、「敵の一部マニラへ侵入し、第一次陸戦配置につけ」の命令です。庶務主任は、最

後の飛行機が出るから「手紙を早く書け」と印を押し
て持って行ってくれましたが、その手紙が届いたのは
復員中でした（マニラ市内侵入は昭和二十年三月三日）。

部隊はマッキンレー（桜兵舎）に後退しました。大
きな洞窟があり、一時その中に入って、マニラの陸上
戦闘を見ていました。負傷者がどんどん運び込まれる
ので、病院の方は大変だったようです。敵機は低空で
飛んでいました。

マニラ東方の海軍防衛隊が編成され、司令は北韭の
古沢大佐、参謀の峯尾少佐はレイテ戦最後着任されて
いました。マッキンレーから更に、米軍に押され、東
海岸に向け移動しました。もうどうにも、こうにもな
らぬ状況で、昼間は山中に入り夜歩く。途中、川べり
に温泉があり、皆生き返った気持ちになりました。こ
れが戦争でなければ良い気候、良い風景だと思いまし
た。武器は手榴弾（現地製で、パイプを切って両端を
溶接し、発火装置は機銃の雷管を差し込み、それに小
さな木を輪切りにしてはめたもの）二個、最初、防衛
面は持っていましたが、皆すぐラモン湾あたりで捨て

ました。

マニラの東、ラモン湾、インファンタ到着。それま
では主計科は一緒でしたが、第一大隊副官付きとなり、
総員名簿、軍艦旗、信号銃を大切に保管していました。
飛行場整備主任だった宮本大尉が大隊長、副官大島中
尉で、それらの人たちは、私が副官部へ一人残ってい
た時の人々でした。

各部隊はそれぞれ警備地域が決められていて、その
中で部隊自活の方策をとったのです。椰子の木は宝で
した。実も幹も芯も有り難い食糧でしたし、屋根も葺
ける。これがあれば何でもできる。油も取れる（実二
〇個で一升の油）。その他家畜を徴発したりして生き
ていました。

敵は艦砲射撃をしてくるし、来襲もするので山中に
籠もる。大隊長から「ついて来い」と言われ山に登る
と、目の下に砲艦級の艦が陸に接近して動きながら艦
砲を撃っている。

我が方には斬り込み陣地が作られていた。小屋には
米や糶も貯蔵してあり、地形をうまく利用していて良

かったのです。斬込隊は各中隊から出しているのので、大隊本部の者でも行かなければならず、一回だけ参加しました。そのとき、「貴様は、お前の職務（主計、庶務など、総員名簿等の担当の私でなければならぬ仕事）を忘れるな」と上官に言われたのは、「死ぬな」という言葉が裏にあったのです。

斬り込みは、三〇発の弾倉が着いたマシンガンを敵陣や天幕に撃ち込み、他の者は手榴弾を投げるだけでした。米軍にだんだんに圧迫され、食糧は少なく栄養失調やマラリア、赤痢などになり、移動する度に白骨死体が増えてくる。死体には蛆がわき、骨だけになってしまうからです。死体を埋めてもらえる人は幸せでした。

奥地へ奥地へと移動していくのですが、顔と足が交互に腫れてくるのは栄養失調です。脚気になりマラリアで熱病になると歩けなくなり落伍していきます。山やジャングルの中では山蛭に血を吸われ、皮膚は疥癬になる。遺族方には申し訳なくて状況の話せない生き地獄でした。そのうちに敵機から「無駄な死に方は

するな」というようなビラが撒かれます。自分の命もどうなるのか、明日の命もわかりませんが、「死は易く、生は難し」の言葉そのままでした。

終戦となって山を下りることになり、手榴弾を集めて川で「ぼら」を取り一匹ずつ分配しましたが、火を炊いても空襲はなくなったので、その魚は美味だった。いよいよ収容所の生活が始まったのですが、故郷に出す葉書が「くじ」で当たり、家に出すのですが、当たらなかった人の留守宅へ次から次の人へと便を送るようになって、大変喜ばれました。そのうちの一人には、既に戦死の公報が出ていたのに、この便りがあり家族が大変喜ばれたという話もありました。

しかし、フィリピンでは原住民との戦犯問題が多くありました。山から下りるとき、峯尾部隊（マニラ東方防衛軍参謀）の峯尾少佐は自分が一切の責任を負うから「山から下りたら、何でも『峯尾部隊』だと言え」と、戦犯問題のすべての罪をかぶられたと聞いています。

収容所の食料は、最初は少なかったが、だんだんと

良くなり、体力も逐次回復してきました。私は三月、虫垂炎で入院、手術を受けました。

内地帰還は、早い人は昭和二十年十二月の人もいましたが、私は米国の艦に乗り、昭和二十一年四月、神奈川県に上陸、旧野比海軍病院に入り復員することができました。

孤島の従軍記

山口県 野村 勲

昭和十八年三月、私の結婚記念日です。重苦しい戦時下のこと親父とおふくろは、どうせ近いうち兵隊に行く息子だから今のうちに嫁をもらって家の跡継ぎを急げ、とばかりに母親の遠縁に当たる娘に目をつけて結婚式をあげさせたいんです。

満二十歳の花婿と十九歳の花嫁は、当時の盛装といっても国民服とモンペ姿でした。隣に並んだ嫁さんを見て、なかなかいい娘だなあと思ったのが実感でしたが、

甘い新婚生活も夢のうち、翌昭和十九年一月の正月気分もまださめやらぬある日、和木村役場の兵事係が「二月一日、呉海兵団ニ入団スベシ」との海軍の召集令状を持ってきた。そのころ、上映されていた映画「荒神山の吉良の仁吉」の主題歌に「嫁と呼ばれて未だ三月」とあったが、あの心境でした。全く戦争とは無情なものと感じました。

多勢の村人や小学生の歓呼の聲に送られ、村境の大和橋で召集された三人を代表して挨拶をしたことを思い出します。なんと言ったか忘れてたが強そうなりっぱなことを言ったようです。

大竹駅から汽車に乗り、どよめく万歳の声、そのときホームの柱のかげで黙って私の方を見つめていた新妻の淋しげな顔が忘れられなかった。

昭和十九年二月一日、送ってくれた伯父と別れて宮門を潜れば、ここは別世界。受付をすませて身体検査、身長、体重測定、内科検診、「まごまごするな」と怒鳴られながら軍医の前に立った。聴診器を当てた軍医は「右肺尖部呼吸延長」、何のことかわからんが、大